

2017年1月20日

### 博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学  
研究科名 大学院人間科学研究科  
申請者氏名 劉 昊  
学位の種類 博士（人間科学）  
論文題目（和文） 在日中国人ニューカマーと教育—非集住地域に着目して  
論文題目（英文） Education of Chinese Newcomers in Japan: With a Focus on a Less Concentrated Area of Chinese Residents

#### 公開審査会

実施年月日・時間 2016年11月24日・13:00-14:00

実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第4会議室

#### 論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	森本 豊富	Ph. D.	UCLA	文化人類学・移民研究
副査	早稲田大学・教授	店田 廣文	博士（人間科学）	早稲田大学	社会学・地域研究
副査	早稲田大学・准教授	原 知章	博士（文学）	早稲田大学	社会・文化人類学

論文審査委員会は、劉 昊氏による博士学位論文「在日中国人ニューカマーと教育—非集住地域に着目して」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

#### 1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1 オートエスノグラフィーにおけるインタビューの手続きや使用方法に関する質問があった。劉氏は、オートエスノグラフィーを執筆するにあたり、ニューカマーの教育に関する研究を行っている研究者2名に筆者の生い立ちについてインタビューを依頼し、インタビューデータを文字起こしたうえで、分析の際の主観抑制に用いたと述べた。
- 1.2 非集住地域における中国人ニューカマーの全体的な教育戦略がどのようなものなのかという質問に対しては、問題が「個人化」する非集住地域では、母親たちの教育戦

略は多様性に富む一方、子どもの教育達成に対する強い希求が共通する点であると回答した。

- 1.3 父親の教育意識に関する質問には、本研究では、父親からの協力が得られなかったため、今後の課題とすると述べた。
- 1.4 国家単位ではなく、対象者のローカルなホーム意識に関する質問があった。これに対しては、対象者の中には、Q市を自分のホームだととらえる者もいた。しかし、非集住地域という場所がどのように作用したのかまでは明らかにできなかったと回答した。

## 2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士學位論文に対して、以下の修正要求が出された。
  - 2.1.1 インタビュー手続きを明記すべきである。
  - 2.1.2 前後関係が矛盾している文がある (p. 2, 11. 1-4)。
  - 2.1.3 親の教育戦略が筆者の育ちの過程にどう影響したのかを小括で触れた方が良い。
  - 2.1.4 親たちの学校外教育と経済状況に関する記述を盛り込むことが望ましい。
  - 2.1.5 誤字脱字や形式上の修正点が指摘された。
- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。
  - 2.2.1 オートエスノグラフィー執筆におけるインタビューデータの使用法を加筆した (p. 14, 11. 20-24)。なお、この点は第4章にも示してある。
  - 2.2.2 序章の脚注 (p. 17) で説明を加えた。
  - 2.2.3 母親の教育戦略に関しては、既に4章で触れている。そのため、4章小括で要約をした部分を加筆して対応した (p. 117, 11. 13-17)。
  - 2.2.4 第2章に新たに節を設けて対応した (pp. 38-39)。具体的には、母親たちの教育に対する熱心さを学校外教育という視点から示した。その際、経済的余裕が母親の主体的な学校外教育を可能にしている点にも言及した。
  - 2.2.5 誤字脱字や形式面の修正を行った。

## 3 本論文の評価

### 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：

本研究は、非集住地域の在日中国人の教育に関して次の2点を明らかにすることが研究目的としてあげられている。(1) ニューカマーを「問題」を抱える存在や抑圧された存在だととらえず、主体的な側面を重視し、郡司(2005)が主張する「積極的位置取り型」研究に立脚する。(2) ニューカマーの子どもたちの「今」を理解するためには、「どこから来たのか(ルーツ)」だけでなく、「どのようにして今に至っているのか(ルート)」を問うことが重要である(渋谷 2013, 2)という立場に立ち、本質主義的な視点ではなく、構築主義的な視座から研究する。

以上の二つの視座に立脚することで研究目的は明確になり、調査対象である非集住

地域の中国人ニューカマーに関する調査として妥当性が認められる。

3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：

本論文では、2013年から2016年にかけてQ市で断続的に行った半構造化インタビュー調査をもとに考察している。第2章、第3章のサンプリングは、幼少時から親交のある中国人ニューカマーを訪ねる方法と、スノーボールサンプリングを併用している。対象者は母親が9名、子世代が9名である。対象者とのラポールは十分に形成されており、インタビューは1時間から3時間。対象者の希望や言語能力にあわせて、中国語と日本語を使い分けている。インタビューデータは日本語に翻訳したうえで文字起こしを行っている。また、第4章では申請者自身が対象者となるが、ニューカマーの教育を専門とする研究者2名からインタビューを受ける方法を用いている。なお、そこで得られたインタビューデータをそのまま使用するのではなく、研究者自身の記憶との整合性をとるために使われている。

以上のことから、本研究の明確性と妥当性が担保されているといえる。

3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：

本論文は、第1章で在日中国人の歴史をオールドカマーとニューカマーに分けて詳述し、研究の対象となっているニューカマーの位置づけを明確にしている。第2章では母親たちの「創造的教育戦略」を5つの事例を細かに分析することによって明らかにしている。多様な教育戦略が見られたと同時に、選択肢が限られた環境に一方的に溶け込むのではなく、もがきながらも自身が望む教育達成を目指すという共通項もあることが論じられている。第3章では、子世代の対象者を「細分化されるホーム意識」という観点から分析、考察し、次の3点が明らかになっている。

- (1) 中国系としての自己肯定感の喪失によって、時としてホームとしての中国を自ら切り離し、日本にホームを求めるようになる。
- (2) 祖父母との生活を思い描くなど中国に対する希求を高める者もいるが、言語の壁などにより将来展望から切り離されていく。
- (3) 単純に中国か日本、あるいはその両方という区分ではホーム意識はとらえられず、意識は細分化していくとまとめている。

以上のことから、本研究は目的で述べられた点について明確な答えに導かれているといえる。

3.4 本論文の独創性・新規性：

- 3.4.1 本論文は、集住地域ではなく非集住地域に住む在日中国人ニューカマーを対象としている点において新規性がある。
- 3.4.2 親世代と子世代をそれぞれの枠組みで分析、考察し、自身の経験も振り返りながら内省的に論を展開している点において独創性がある。
- 3.4.3 第4章「私の成長物語」において、赤裸々に自身の生い立ちを自叙伝的な記述と、個人と文化を結びつける重層的な意識のあり様を開示するオートエスノグラ

フィーという方法を用いている点において、独創性と新規性が認められる。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：

- 3.5.1 本研究の学術的意義は、調査者本人が言語的、文化的側面においてインサイダーからの視点を保持しながら調査するという立場を最大限に活用している。この点において日本におけるエスニックマイノリティ研究、異文化間教育研究への貢献度は高い。
- 3.5.2 今後さらに増加が見込まれる在日外国人、とりわけ在日中国人のニューカマーの多様性と共通性を非集住地域において検証したという点において、一般の日本人には可視化されていない個々の在日ニューカマーの物語をつまびらかにした。
- 3.5.3 オートエスノグラフィーは挑戦的な試みであり研究者自身に勇気と冷徹な「客観性」が求められる調査方法である。代表性、再現性の担保という立場からの批判はあるかもしれないが、文化人類学、エスニック研究の立場からは、その信頼性、妥当性は認められる。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：

- 3.6.1 人間を対象とした学際的、学融的学問領域である人間科学において、自身の経験も踏まえながら内省的に分析、考察した点は、人間科学の進展に寄与するものと評価できる。
- 3.6.2 在日中国人ニューカマーの母親世代と子世代への密着した聞き取りを実施することにより、個としての人間と個を囲む環境との相互作用について「分厚い記述」を行った。エスノグラフィ的アプローチからの研究として人間科学に対する貢献が認められる。

4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

- (1) 劉 昊, 「外国人散住地域における在日中国人ニューカマーの『創造的教育戦略』」 『移民研究年報』第21号, 2015, pp. 139-156. (査読あり) (博士論文第2章)
- (2) 劉 昊, 「非集住地域における在日中国人ニューカマーのホーム意識—中国との関係性の不在に着目して—」 『21世紀東アジア社会学』第8号, 2016. pp. 92-106. (査読あり) (博士論文第3章)

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上